

村上春樹の

ペーパーバック・ライフ

第1回

A Tree of Night and
Other Stories
—Truman Capote



僕の家に来た人が本棚にどっと積んであるペーパーバックの山を見てまず訊ねるのは、「これほんとに全部読んだんですか？」ということである。本当のことを言うのと、とてもそんなもの全部読めない。せいぜい読んだのは「在庫」の四割くらいのものである。あとの六割は(1)読もうと思っ

た(2)買うことは買ったけど興味がなくなっ
てしまった(3)十ページくらい読んだけど面白く
なさそうだったのでやめた、といったような理由で
手つかずで放り出している。とくに仕事
がらみで系統的に読まなくてはならない本の数が
増えてからは、そうそうは好き勝手に乱読が
できなくなって、これはつらい。ペーパーバック・
リーディングの魅力は「当るをさいわい」とい
った一種の非系統的なでたらめさにあるのだから。
しかしペーパーバックの山を見た人の多くが「
これほんとに全部読んだんですか？」と訊ねると
いうことは、結局ペーパーバックを買ってはみた
けど読みとおせず、そのへんに放り出してある
という人々の数がけっこう多い事実を示唆して
いるのである。これはまあごく当然のこと
で、外国のことばがぎっしりかつまった本を
読みとおすという行為はいちいち細かく考
えていくと並大抵のことではない。

ただ僕は「人間のあらゆる行為は習慣的

僕の人生を変えたのは……

行為である」という強固な信念の持ち主だから、
いろんなことをそれほど細かくは考えない。所詮
人間の書いたものが人間に理解できぬわけはない
(これは高校の英語の参考書に出てきた例文)と
いうくらいに気楽に考え、とわりに楽に英語の本は
読めるし、はじめの二、三冊を楽に読んじゃうと、
あとはもうそれこそ「習慣的行為」である。意味が
わからなかったり読み違えたり、というのは
そもそも読書の基本的な要素なのであって、
そういうのは人に押しつけない限り害はない。
いちばん大事なのは文章の匂いとリズムをつか
むことであり、たつたひとつでもいいからその
本のきもに触れて帰ってくることである。あと
それにつけ加えるなら一冊の本で一カ所くら
いはくすつと笑ったり、ほろっとしたり、ぞく
つとしたりすると申しぶんないんだけど、
それはまあ本の質にもよるからなんとも
言えない。昔からわりにそういう考え方を
していたので、高校時代の英語の成績
なんかはあまり良くなかった。でもその
かわりロス・マ

クとかチャンドラーとかのペーパーバックを古本屋で買い込んでかたっぱしから読み漁っていた。

僕が生まれてはじめて英語の「純文学」を読んだのはたしか十八のときで、本は Truman Capote の *A Tree of Night and Other Stories* であった。そもそも僕がこの本を読みたいと思ったのはここに収められた「The Headless Hawk」の冒頭の文章が、僕の使っていた英文和訳の受験参考書の例文として引用されていたからである。僕はこれを訳してみても、訳しながら胸がわくわくして、体がぞくぞくした。受験参考書の例文を訳しながらこんな気持ちになったのはもちろんはじめてのことである。そのとき僕が訳したのは冒頭の「Vincent switched off the lights in gallery.」から次のページの「It was the kind of face one sometimes sees in paintings of medieval youths.」というところまでだけれど、この部分は今読みかえしてみても実にほればれとして匂いたつような文章である。感覚的・生理的な文章なのだが、自然で押しつけがましくなく、描写も的確である。つまらないことばも使われていない

し、不自然な言いまわしもない。しかし何よりすばらしいのは、なんだか匂いつきの3D映画みたいに小説の情景がうわっとこちらにとびだしてくることである。カポティという人は本当に genius という以外に形容のしようのない作家だと僕は思う。

その例文に感動した僕はすぐに丸善にとんでいって前述したペンギン版の *A Tree of Night*... を買ってきて、頭から尻尾まで一気に読んだ。それで全部読み終えて、「これは実にすごいと思った。『The Headless Hawk』ももちろん良かったけど、『Master Misery』、『Miriam』、『Shut a Final Door』、『A Tree of Night』と文句のつけようのない作品揃いである。うまく言えないけれど、その本の中にぎっしりとぶ厚い空気のかたまりが詰まっているような気がした。

それ以来受験勉強なんてそっちのけでカポティ狂いである。「ティファニー」や「遠い部屋」や「冷血」や「グラス・ハープ」もぜん



A Tree of Night and Other Stories

ぶペンギン版で読んだ。そのせいかどうかはべつにして学部志望も法学部から文学部に変った。そう考えてみると、受験参考書でカポティの文章に出会わなかったら僕の人生も今とはずいぶん変わったものになっていたかもしれない。そういえば僕の最初の小説のタイトル「風の歌を聴け」は「Shut a Final Door」の最後の一行「think of nothing things, think of wind」からつけた。

何かことあるたびに僕はこの一行をふと思い出す。龍口さんはこれを「何も思うまい、いろんな事を思うまい、ただ風にだけ心を向けよう」と訳していて、僕もそれ以上の訳はないと思うのだが、それでも原文の持つむせかえるようなぶ厚い感触はやはり伝わってはこない。

このペンギンの *A Tree of Night*... の六七年版の表紙が僕はとても好きだったのだが、その本はある女の子に貸したままその子と一緒にどこかに行ってしまった、今手もとにあるのは七八年版のやはりペンギンである。まあ表紙なんてどうでもいいといえどもいいんだけど。